新・奥会津だより
vol.3
2021 Winter

Flow【フロウ】

福島県奥会津の暮らしに息づく伝統文化は、只見川・伊南川とその支流に集約される豊かな水の流れの中で育まれてきました。
Flowは、奥会津の宝である「豊かな自然・伝統文化・ここで生きる人」を、皆さんと見つけていく情報紙です。

奥会津をつなぐ人々

冬の手仕事で技をつなぐ 檜枝岐の「曲げ輪」文化

シーズン中は尾瀬のガイドとして活動し、
冬は檜枝岐村に伝わる「曲げ輪（わ）」を作る城健史さん。
「材料にこだわるより、ものがあることが大事」と
曲げ輪の材料は昔ながらのネズコではなく杉を使う。
自由に、飄々（ひょうひょう）と。「出ていく理由がない」村で
二足の草鞋（わらじ）を履いた暮らしを楽しんでいる。

自然と伝統文化がある地で暮らしたいと村へ移住

柾目（まさめ）が美しい、厚さ約3ミリの杉の薄板を熱湯で茹でること約1時間。取り出した板を小判型の型に巻きつけ、手際よく曲げていく。「90度くらいの温度で茹でると、板が曲がるようになるんです。杉は引き上げたそばから硬くなっていくので、すぐに曲げないとダメ。素手だから熱いですよ。我慢ですよ」

檜枝岐村役場近くの作業場で神奈川県出身の城健史さんが作っているのは、曲げわっぱの弁当箱だ。村では「曲げ輪（わ）」と呼ばれ、古くから農具のふるい、せいろ、山仕事に持っていく弁当箱などが作られてきた。伝統的な曲げ輪は地元でネズコと呼ぶ黒檜（クロベ）を使うが、城さんは厳選した質の良い柾目の杉を使う。「ネズコと杉は性質が全然違うんです。ネズコは粘りが強く、杉はネズコより硬くてちょっと曲がりづらい。香りも色も違います。ネズコは趣のあるくすんだ色で、杉は明るい感じですね」

若い頃から田舎暮らしに憧れていたという城さん。ガイドの仕事ができる自然と伝統芸能・文化がある〝安住の地〟を探して全国各地を巡り、檜枝岐村に辿り着いた。尾瀬をはじめとする大自然があり、檜枝岐歌舞伎が伝わる村は希望どおりの場所だった。「でも住むところも仕事もなさそうだし諦めて帰ろうとしたら、温泉で会った地元の人が村で地域おこし協力隊を募集していると教えてくれて。そのまま役場に行って応募して、1週間後には住み着いていました」

材料をネズコから杉に変更し自分なりの曲げ輪作りを確立

城さんは2015年から3年間、檜枝岐村の地域おこし協力隊として活動。尾瀬のガイドなどをするかたわら、以前から興味があった村の伝統文化について勉強した。「地域おこし協力隊を辞めた後ガイドだけで食べていくのはリスキーかなと思って、冬に何か作ろうとなりました。村の伝統工芸には木で作る杓子（しゃくし）とかへらとかいろいろあるんですけど、一番お金になりそうなのは曲げ輪かなと（笑）。この村の曲げ輪文化を残したいという思いもありましたね」

曲げ輪作りをしようと決めた城さんは、檜枝岐歌舞伎「千葉之家花駒座」前座長で友達でもある星長一さんに相談に行く。「この村で何かやりたいと思った時、いつも長さんに相談するんですよ。長さんも曲げ輪を作っているので『教えて』と言ったら、作り方を細かく書いたメモをくれたんです。これが自分の曲げ輪の原点。長さんのやり方に自分なりのやり方を加えて作っています」。ものづくりの経験はなく、道具や機械の使い方も独学で一から覚えた。試行錯誤を繰り返し、商品として売れるようになるまでに2年以上かかったという。

曲げ輪の材料は、昔ながらのネズコから杉に変えた。近年、檜枝岐産ネズコの調達が難しくなっているからだ。「林道がなかったり国有林だったりで切り出すのが難しいんです。ネズコにこだわってものが作れなくなるより、ものがあることが大事だと思うので杉を使っています。技術が残っていれば、材料を変えるのはなんでもないことですから」

現在、城さんの曲げ輪は会津若松市の割烹『田季野』でも使われている。「曲げ輪作りは面倒くさい工程がいっぱいあって、我慢してやっています」と笑うが、「サイズや形を変えたりして新しいものの研究開発をするのは楽しいですね」とも話す。いま作りたいのは箸箱だそうだ。

シーズン中は尾瀬などのガイドを行い、依頼が減る冬に曲げ輪を作る。そんな城さんに檜枝岐村に住み続ける理由を尋ねると、「単純に出ていく理由がないから」と返ってきた。「やりたいことをやっているし、これからも日々こうやって生活していければいいかな」。ここには自然と伝統文化があって、仕事もある。それで十分だ。「出ていく理由がない」という城さんの言葉に、檜枝岐村の豊かさを教えられた気がした。

杉の角材を製材し、カンナで厚さ約3mmに仕上げた後、熱湯で1時間ほど茹でる。手間ひまのかかる工程が多く、完成までに10日程度かかる

茹でた板を型に巻きつけて曲げ、テープで固定して1週間ほど乾燥させる。粘りがなく、曲げている途中で折れてしまう木も少なくないという

村で曲げ輪を作るのは城さんを含め4人。木の調湿作用で冷めてもご飯がおいしいと人気の弁当箱は『尾瀬の郷交流センター』などで購入できる

城 健史（じょう たけし）さん

大阪生まれ、神奈川育ち。広島県安芸太田町、北海道釧路市を経て檜枝岐村に移住。広島で神楽を見て日本の伝統芸能・文化に魅了される。「尾瀬檜枝岐浪漫紀行」の屋号で、尾瀬などを案内するガイドの活動と曲げ輪の製造・販売を行う。6～7月には村の郷土料理に使われるサンショウウオ漁も行っている

尾瀬檜枝岐浪漫紀行
檜枝岐村字下ノ原908-1
TEL：070-5285-6855
メール：oze.guide@gmail.com
https://www.facebook.com/ozeroman

ただでん掲示板 vol.3

只見川電源流域振興協議会からのお知らせ

ブナの葉の草木染を体験

11月7日（日）、奥会津体験博覧会「せど森の宴」のプログラムの一つである「ブナの森から秋色のおすそわけ ブナの葉染めで、わたしだけの大きなハンカチ作り」が開催されました。只見町内には広大なブナの森が広がっており、2014年にはユネスコエコパークにも登録され、ブナの恵みを生かす活動の一つとして、ブナの葉染めが始まりました。

鈴木サナエさんの案内のもと、参加者全員が各々好きな絞り模様をつくり、ハンカチ染めを体験しました。紅く色付いたブナの葉で染めると、淡くてやさしい茶色になります。参加者の方からは「只見町や奥会津地域の歴史や文化、ありのままの暮らしぶりに触れることができ、もっとこの地域が好きになった」などの感想をいただきました。

奥会津体験博覧会「せど森の宴」は奥会津地域のありのままの魅力に触れることができる様々なプログラムを2022年2月12日まで開催しています。ぜひ一度、公式HPをご覧ください。

草木染の材料となるブナの葉

染液から取り出し、水洗いをする

わたしだけの大判ハンカチの出来上がり

福島県民限定
奥会津体験博覧会
「せど森の宴」
2021.10.30
→2022.2.12
せど森の宴公式HP

読者の声

●これまでの奥会津だより、毎回楽しく懐かしく拝読してきました。この度「新・奥会津だより」をいただき、ありがとうございました。コロナ収束後は、何としても会津の旅を実現したいと思っております。（東京都東久留米市・STさん）

●山歩きをしていた時に、檜枝岐村、南会津町をよく訪れていました。また、母が日本の3大虚空蔵の一つ、柳津町の虚空蔵さんを信仰していたこともあり、奥会津は関心のある地域です。奥会津についてのいろいろな情報を届けていただき、毎号興味深く読ませていただいています。（栃木県宇都宮市・SYさん）

●私は奥会津地方が大好きです。通い始めて20年になります。コロナのこともあり、この1年半は行っていませんでしたが、それまでは年に2回、南会津町の民宿に宿泊して、温泉を巡っていました。（群馬県伊勢崎市・MSさん）

編集・問合せ先
新・奥会津だより「Flow」編集部（株式会社日進堂印刷所内）
〒960-2194　福島市庄野字柿場1-1
TEL:090-6852-0953（専用電話）　FAX：024-594-2041
Eメール：flow@nisshindo.co.jp

ご意見・ご感想をお寄せください。
奥会津だよりの定期購読を希望される方は、編集部まで、発送先（ご住所・お名前）をお知らせください。
個人情報の取扱いにつきましては適切に管理を行っています。詳しくは、日進堂印刷所のホームページをご覧ください。

奥会津 歳時記の郷（おくあいづ）
自然の中に
暮らすいとなみ、
100年先のみらいへ。
最新情報はホームページでご確認ください。

只見川電源流域振興協議会 事務局
〒968-0006　福島県大沼郡金山町大字中川字上居平933番地
東北電力奥会津水力館「みお里」奥会津振興センター内
TEL:0241-42-7125　FAX：0241-42-7127
Eメール：tdrsk@okuaizu.net

只見川電源流域振興協議会の主催・共催事業については、最新情報をホームページで随時公開しています。
この冊子は電源立地地域対策交付金の事業より作成されています。

令和の奥会津風土記
～むらをあるく～

檜枝岐村・南会津町舘岩地区・伊南地区編

会津学研究会　菅家　博昭

菅家博昭
プロフィール

1959年生まれ、昭和村在住、花農家。会津学研究会代表、昭和村文化財保護審議会委員長を務めるなど、会津地域を中心に調査を続けている。著作に『苧（からむし）～地域資源を活かす生活工芸双書』『暮らしと繊維植物』など。

人と樹木の関係とその歴史を見る

7月の上旬、檜枝岐村と南会津町を歩いた。

開村の歴史と森林資源を生かす知恵

1 檜枝岐村では、集落南部に移転復元された井籠板倉（せいろう）、落し貫板倉を視察。樹木利用の技術文化がうかがえる野外展示施設である。

落し貫板倉

井籠板倉

樺の樹皮の上に割板を葺き、その上を石で抑えている

また集落内には３人の開村者の墓印の木と伝承される古い桂樹、黒檜（クロベ）樹の２本の木（松は枯死）が現存しており、他所ではあまり感じられない基層文化を示している。

墓印の木。手前は桂樹

集落内には多くの石仏が点在している

2 境界にある村は峠の向こう側の政治勢力との両属性があり、群馬県側との婚姻・交流も多い（『檜枝岐村史』1970年）。

檜枝岐村の近世資料は『福島県史10下』（1968年）に、小羽板（木羽板、曽木等）23件の書面が掲載されている。それを読むとかなりの森林が伐採されているが、それは小さな板にして移出するもので、割りやすい針葉樹は小さな板にして主に屋根材とした。『県史』を読むと会津若松城や江戸市中の屋根材等に檜枝岐の樹木が利用されている。

10年ほど前に鹿児島県の屋久島でみたスギを平木にして移出するあり方に酷似している。

平木
（屋久島 自然館内に展示）

伐採作業用の各種道具
（檜枝岐村歴史民俗資料館）

昭和村でも、木羽での出荷を記録した出荷帳が残されている。

檜枝岐村の歴史的な樹木利用の文化、特に曽木（小羽板）の調査が重要である。

3 一方舘岩地区は、峠を通じて栃木県との交流が深い。近代の山林資源の利用（狩猟、木材加工技術等）は栃木県との交流を示している。

尾根にあるヤマグルマの樹皮を利用したトリモチ製造を専門に行っていた村もあり、その製品は木樽に詰められ県外に移出され船の甲板等の接着剤として利用された、という（『舘岩村史民俗編』1992年）。

トリモチを製造した記憶を訪ねて、製造していた村を少し歩いたところ、草を押し切りで切って堆肥を製造されていた男性に出会う。そこで話を聞くと、子どもの頃、虫捕りに使ったという人に出会った。トリモチが家にあったという。

ヤマグルマ
（只見町ブナセンター撮影）

トリモチの話を伺う

戸中の石仏

このほか、山ミツバチの巣の巡視に来られた方の話によると、トリモチ製造は祖父の時代に終わったという。また、鱒沢川にある山の神祭は最近まで行い、4月の祭礼では、身欠きニシンを共食したと語られた。

寒冷地の暮らしと流域で栄えた漁猟

4 奥会津博物館の舘岩館は、畑作の伝統をわかりやすく展示解説した良質な資料館で、雑穀類の穂刈り道具（コウガイ）や、「石ごやし」（石を肥料と見なす、保温剤）など里平（さとだいら）（会津盆地）には見られない野の農の伝統が見られる。

コウガイ
（奥会津博物館舘岩館）

唐箕（奥会津博物館舘岩館）

昭和村でも石を肥料と見立てる考え方がある。からむし栽培では「石馬糞（いしまぐそ）」という伝統技法があり、畑の石は根を暖めてくれるので拾って畑外に出してはいけないといわれている（拙著『暮らしと繊維植物』2018年）。

いずれの地でも、寒冷地ならではの環境の見立てを感じる。

5 只見から続く伊南川流域の水田地帯南端の伊南地区浜野。ここは近世・近代の筏流送（さながし）の拠点であった。

寛政元年（1789）建立の馬頭観音石像
（伊南地区浜野）

寛政10年（1798）建立の薬師堂。水田が広がる

そして内川から左が舘岩地区、畑作地帯になる。右は檜枝岐。その途中にある大桃の高畑スキー場近くにマスダキ（鱒滝）がある。伊南支所で聞くと「獲れたマスは、沼田街道尾瀬を経由して群馬県側に移送し販売した」という。南会津町を流れる伊南川は、『新編会津風土記』では檜枝岐川としている。

かつて南山御蔵入とよばれた幕府直轄地（現在の大沼郡・河沼郡・南会津郡）は、奥会津と呼んでいる（野尻組の蓬莱亭（東原安則）らの詠んだ歌を収めた歌集『百人一首鐘聲抄（しょうせいしょう）』（天保七年（1836）の挿し絵に「奥会津中津川東原氏」と書かれている）が、域内は周囲の自然環境、特に森林資源を継続的に利用する歴史の十分な調査が行われていない。

一方、自然環境そのものについては、只見町ブナセンターが中心となって多くの蓄積がある。そのひとつ、「北限地域に分布するヤマグルマ林の群集組成と林分構造」（『只見町ブナセンター紀要8号』2020年）は、トリモチ原料の樹木がなぜ積雪地帯にあるのかを解明した優れた研究である。

写真：菅 敬浩・菅家 博昭

次は金山町・三島町を歩く。

奥会津の美術館資料館

DATA

斎藤清美術館

詳しくはこちらから

美

柳津町大字柳津字下平乙187
TEL:0241-42-3630
開館時間:9:00-16:30
(最終入館16:00)
休館日:月曜日(祝日の場合は翌日)、
12月29日(水)～31日(金)、
その他、展示替え等のための
臨時休館あり
※2022年は丑寅まつり開催年に
あたるため、1月1日～3日も開館
入館料:大人510円、
高校・大学生300円、
小・中学生無料

斎藤清美術館　生涯描き続けた会津の地で体感する、斎藤清の豊かな芸術世界

窓の外には《会津の冬》にも描かれた風景が広がる

時代とともに作風が変化。12月からの企画展は1950、60年代に着目

単純化されたフォルムとビビッドな色彩。木目や木肌、雲母などの材質感を生かして作り出す複雑なニュアンス。人の営みの温かさまで伝わってくるような、ふんわり、こんもりとした雪景色。会津が生んだ世界的版画家・斎藤清の作品は実に多彩で豊かだ。「一つのところにとどまらず、90歳で亡くなるまで様々な表現や技法、テーマに挑戦し続けたのが斎藤先生の特徴であり、魅力だと思います」。『斎藤清美術館』学芸員の伊藤たまきさんはそう語る。「年代を追って見ていくと作風の変化がわかっておもしろいですよ。そこから先生の心情や思想も読み取れるように感じます」

同館では多彩な切り口の企画展を春、夏、秋、冬の年４回開催。12月11日(土)から始まる「コレクターズepisode1」では斎藤芸術を語るうえで重要な1950年代、60年代の作品約120点を紹介する。人気の高い《会津の冬》シリーズなど、繊細なグラデーションによる陰影が抒情豊かな作品は70年代以降の制作。その絵画的表現を形成する基盤となった時代の優品を間近で鑑賞できる。

《会津の冬》シリーズでふるさとの雪景色を描き続けた理由とは

４歳で生まれ故郷の会津坂下町を離れた斎藤清は30歳以降たびたび会津を訪れ、晩年の10年余を柳津町で過ごした。ライフワークともいえる《会津の冬》シリーズで、会津の雪景色を描き続けた理由はなんだったのだろうか。「斎藤先生は『構図なんだ』とおっしゃっています。先生の芸術にとって構図はとても重要な要素です。雪ですっぽり覆われると細かいディテールが消え、外郭だけが残りますよね。そのシンプルさが、先生が求めていた構図なんです。ただ、ふるさと会津への郷愁も根底にはあったのではないでしょうか」(伊藤さん)

来年、開館25周年を迎える同館では４月23日(土)から１年間、企画展「大コレクション展」を開催する。ほぼ毎月展示替えをして、版画の原版や愛用の筆などの資料類も含む全コレクション約1,000点を公開。柳津町をはじめ三島町や金山町を描いた《会津の冬》の名作も並ぶ。この機会に足を運び、画家の目を通したふるさとの風景をじっくり体感してみたい。

ポストカード、カレンダーなどが並ぶミュージアムショップ

斎藤清アトリエ館

詳しくはこちらから

展

斎藤清が晩年を過ごした住まい兼アトリエが当時のまま残されている。3階建ての建物の窓の外には、作品と同じ奥会津の景色が広がっている。

柳津町柳津字十二所乙137-1
TEL:0241-42-2509
開館時間:10:00-16:00
休館日:月曜日、
冬期間は土・日・祝日のみの開館
入館料:無料

三島町生活工芸館

詳しくはこちらから

展

山間地における積雪期の手仕事として受け継がれてきた奥会津編み組み細工。籠や笊などの作品展示の他、体験教室も実施している。

三島町大字名入字諏訪ノ上395
TEL:0241-48-5502
開館時間:9:00-17:00
休館日:月曜日
(祝日の場合は翌日)、
年末年始
入館料:無料

ふるさと館田子倉

詳しくはこちらから

資

田子倉ダム建設の際に湖底に沈んだ田子倉集落。その記憶を後世に残すことを目的に開設された資料館で、歴史、生活文化について学ぶことができる。

只見町大字只見字田中1299
TEL:0241-72-8466
開館時間:9:00-17:00
休館日:火曜日
(祝日の場合は翌日)、
年末年始
入館料:高校生以上310円、
小・中学生210円

2021年NHK大河ドラマ「青天を衝け」ロケ地

奥会津博物館(本館)

詳しくはこちらから

博

山・川・道をテーマに、生活用具等を数多く展示。江戸時代に花開いた農村歌舞伎や会津漆器を支えた木地師文化などの隆盛が伝わってくる。

南会津町糸沢字西沢山3692-20
TEL:0241-66-3077
開館時間:9:00-16:00
休館日:12月～3月の木曜日
(祝日の場合は翌日)、
年末年始
入館料:大人300円、高校生200円、
小・中学生100円

旧南会津郡役所

詳しくはこちらから

歴

1885年(明治18)に落成し、1971年(昭和46)に現在地に移築復元された洋風2階建ての建物。南会津の文明開化の様子が常設展示してある。

南会津町田島字丸山甲4681-1
TEL:0241-62-3848
開館時間:9:00-16:00
休館日:火曜日
(祝日の場合は翌日)、
年末年始
入館料:大人200円、高校生150円、
小・中学生100円

アイコンの見方　美:美術館　博:博物館　資:資料館　記:記念館　展:展示館、展示場　歴:歴史的建築物や史跡等　冬:冬季休業

QUIZ

斎藤清美術館からのクイズです！

《会津の冬》シリーズをはじめ、木版画で数多くの名作を生み出した斎藤清は、様々な絵画表現にも挑戦しています。その中で、1960年代にアメリカで学び、とても熱心に取り組んだ版画技法があります。それは何でしょう？

答えを知りたい方は斎藤清美術館へ

Go!

学芸員・伊藤たまきさん